

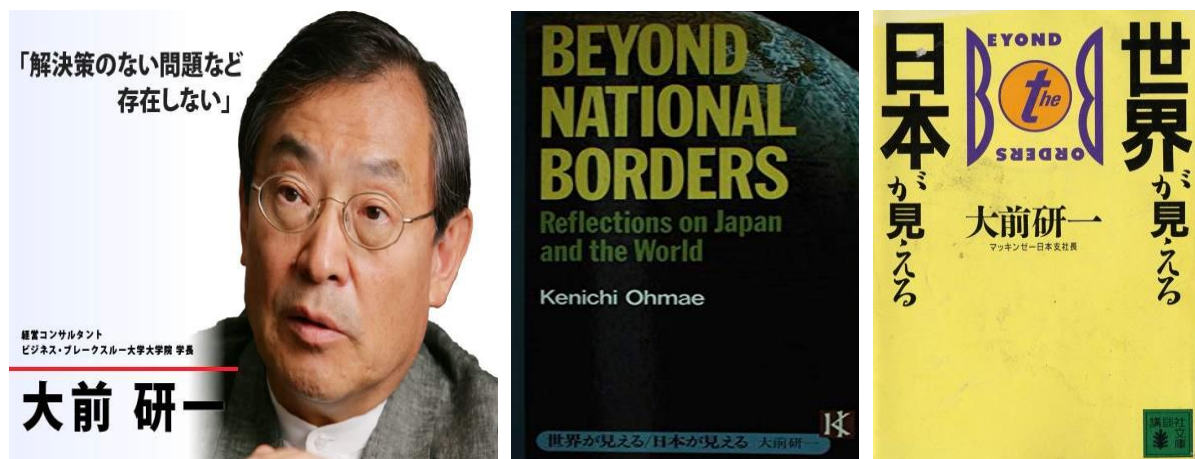
2020 秋 図書館より お薦めの本

“Beyond National Borders: Reflections on Japan and the World” written by Ken-ichi Ohmae (講談社)

Ken-ichi Ohmae has been called Japan’s “only management guru” by London’s *Financial Times*. This book is the distillation of Ohmae’s experience and his writings on international management and business strategy, but you will find something else – the thinking of a man who is both a patriot and a truly global citizen coming to grips with the political and economic challenges facing increasingly interdependent world.

この本は講談社から『世界が見える日本が見える』というタイトルで翻訳本が出ている。大前研一氏はマサチューセッツ工科大学原子力工学科で博士号を取得後、日立製作所で技師として勤務していたが、彼の独特な「システム思考」のもと、経営コンサルタントへ転身し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、スタンフォード大学教授等も歴任した。大前氏が英語で出版した *Beyond National Borders* は我々日本人にはとても読みやすく、また英作文のよき手本にもなる。訳者を介さず日英で同氏が著した書物を是非とも読み比べてほしい。

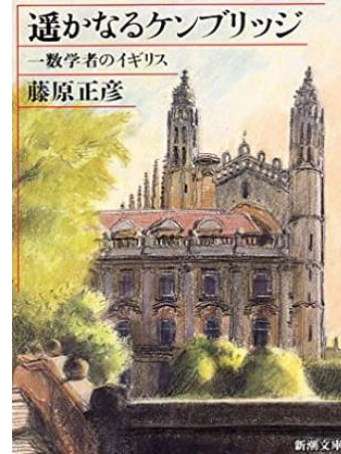
俯瞰度 100 点 視野拡張度 100 点



『若き数学者のアメリカ』藤原正彦 (新潮社)

作家新田次郎の次男、藤原正彦氏は東大大学院数学専攻修了後、お茶の水女子大で長年教鞭をとってきた人物だ。藤原氏を一躍有名にしたのは『国家の品格』だろうが、私は同氏が院生時代に米国へ留学し論文がなかなか書けずに悩んでいた頃の話をもとめたこの本を、将来留学したいと考えている諸君に是非ともお薦めしたい。かくいう私も留学中は論文でかなり苦戦した経験を持っているが、同書が大いに心の拠りどころとなっていたのは事実だ。なお、英国留学を考えている諸君には同氏の『遥かなるケンブリッジ—数学者のイギリス』をお薦めする。藤原氏のような著名な数学者で米国から認められ帰国し、その後英国へ留学してもなお英語論文に苦労するくだりは、多くの留学経験者や語学学習者らが共感できるところだろう。

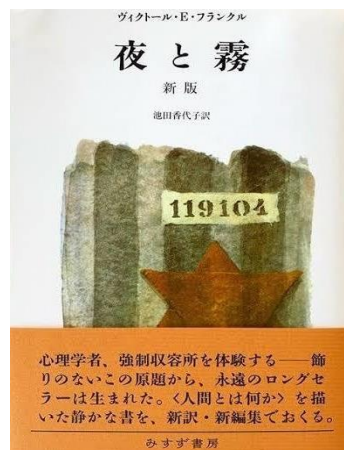
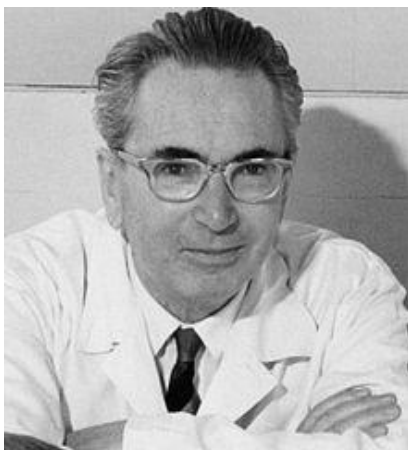
留学希望度 100 点 独り立ち度 100 点



『夜と霧』ヴィクトール・フランクル（みすず書房） 図書館所蔵 946 フ

ウィーン大学医学部教授でユダヤ人精神科医だったヴィクトール・フランクルが2年半にわたりナチスの強制収容所で体験したことを綴った作品である。収容以前にほぼ完成しかけていた彼の独創的な心理療法「ロゴセラピー」は、はからずも彼自身の過酷な収容所体験によってその理論の正当性を立証することとなった。ロゴセラピーとは、人が自ら「生の意味」を見い出せるよう援助する「逆説志向・反省除去」という2つの手法を用いて、心の病を癒していく治療法のことである。悩みごとが多い諸君には是非とも読んでほしい一冊だ。ロゴセラピーに何となく興味のある諸君にはその入門書『ロゴセラピーのエッセンス』もここで併せて紹介しておこう。

読みごたえ度 100点 心理学への関心度 100点



『終末のフール』伊坂幸太郎（集英社） 図書館所蔵 913 イ

人は見えない将来に期待し、そして不安を抱きながら、自分の行き先を自分で決めていく。だが、近い将来の破滅という決定的な現実を前にしたとき、人はどのようにそれを受けとめるのか。地球の破滅を前に生きる人々を通して、未来を問う物語。

「現在の閉塞感が軽くなる？」度 80点

『「民都」大阪対「帝都」東京』原武史（講談社）

東京と関西、国鉄（JR）と私鉄——その対比から立ち上がってくる、日本近代史の試み。「私鉄王国」関西が目指した独自の可能性と、そのつまづきとは。鉄道ファンでなくとも刺激と発見のある、鉄道と近代天皇制をめぐる知的冒険の一冊。

知的な「鉄」分度 100 点

『ぼくは猟師になった』千松信也（新潮社）

普段なにげなく、あるいは大好物として食べているであろう、動物の肉。そもそも人間は動物の肉とどのように向き合い、食べてきたのか。大学生時代からわな猟を続ける筆者の経験からは、現代の人間が見失ってしまった、人間と動物、そして自然環境の関係が見えてくる。なお、本作は今年映画化された。<https://www.magichour.co.jp/ryoushi/>

「肉」のインパクト度 90 点



『草の豎琴』トルーマン・カポーティ（新潮社）

70 年ほど前に発表されたこの小説は、生まれてこの方ずっと一緒に暮らしてきた妹と諍いをおこし突然家出をしてしまったまるで妖精のような老女と主人公の少年が短い秋の間、森の樹の上の小屋に住むという突飛な話ではあるが、当時のアメリカ南部に住む人々の生き方や考え方が日々の暮らしや身近な自然のなかに丁寧に描かれている。

ゴシップ作家の自伝的小説、古き良きアメリカ文学度 100 点

『黄昏に眠る秋』 ヨハン・テオリン著（早川書房）

スウェーデンのエーランド島が舞台となる4部作ミステリーの第1弾。北欧ミステリーというと『ミレニアム』のようなスピード感のある現代的な犯罪小説が多いイメージだが、時に厳しい島の自然とともに平凡に生きてきた80歳の老人が孫の行方不明事件を解決するという他の北欧ミステリーとは一線を画す作品。穏やかに進行する話の最後に「ええっ？まさか！」が待っている。

華やかな夏と美しい冬の間の寂しい秋に北欧を訪ねてみたくなる度 100点

『トリュフの真相』 ライアン・ジェイコブス（パンローリング） 図書館所蔵 657シ

食欲の秋といえば日本では松茸の話題がニュースでもよく取り上げられるが、世界では高級食材として有名なトリュフのシーズンが始まる。希少価値の高いトリュフはどこにどう育つのか？その生産や販売過程で闇社会が暗躍する・・・秘密の多いトリュフ業界の裏側を徹底取材したノンフィクション。

本物のおいしいトリュフの見分け方を学べるかも度 50点



『命売ります』 三島由紀夫（筑摩書房）

読みやすく展開にスピード感のある娯楽作品です。タイトルから星新一を頭によぎる方も多いでしょう。ハードボイルド・ミステリー風ですが三島の死生観、虚無感もわかりやすく現れています。

主人公（というか作者）の闇度、平常運転の60点

『フェルマーの最終定理』サイモン・シン（新潮社） 図書館所蔵 412 シ

「フェルマーの最終定理には、まるで小説のような歴史があるのです」と証明したワイルズが言ったように数学者の歴史ドキュメントが綴られています。出てくる数式を読み飛ばしても十分楽しめます。

数学者たちの真摯度 100 点

『舟を編む』三浦しをん（光文社） 図書館所蔵 913 ミ

辞書編纂に携わる主人公のお話。一途に物事を追い求めていく様を舟を編むというタイトル付け！このセンス！同じように一途に料理の道を歩む女性とのコミュニケーションにほっこり。静かにじんわりと読み進められます。

主人公の誠実度 100 点

